

「美と衛生」論に関する資料*

小野 芳 朗**

健康たる為の技術は、まず予防医学的なものである。19世紀はとかく病気の原因を細菌、bacteria に求める傾向があった。それは当時の細菌学の獲得した輝き伝染病に対する勝利に依るものである。したがって、まず人を不健康にすべき要因をカットすること。つまり、外環境と人体たる内環境の間に細菌を生かささない緩衝地帯をつくるのが肝要となる。まず第一に、人が集団化する場所を清潔に保つこと、即ち浄水、換気等々。さらに、それらの機能を果たす装置群をつくることである。これは今日いわゆる公害防止施設として存在する。また害虫、害動物の駆除、そして人体そのものに免疫をほどこすことである。

こうした、いわゆる「衛生」の体系は、その前世紀と大きく異なる点は、それが「公衆衛生」であったことといえよう。公衆の健康を国家が管理しようという点にある。一方で「養生」の言葉に表わされる個人衛生の中で、日常的に体力を補うことが流布されていく。「体育」である。

さて、近代体育で、その代表的かつ重要な文献に関し、近年集成が復刻された。岸野雄三監修『近代体育文献集成』全30巻（日本図

書センター⁽¹⁾）である。これは体操、武道、教練、遊戯、保健の5カテゴリーから編纂されている。近代体育は、西洋式のものであることはいうまでもないが、そのみならず日本の要素をおりこんだ健康思想に、医学的合理主義を加え、人為的運動法たる健康維持・増進法として発展した。初期のリーランドによる体操伝習所系譜の普通体操は、高度な技術を用いず、老若男女誰れでもできるものである。さらに、スウェーデン式体操の導入、陸軍における器械運動の発展がある。また我国独特のものとして、武術が教育体育の中にとりこまれることがある。前記集成は、これらの基礎文献を収録している。さらに、遊戯は、まさに簡単な児童の遊びから始まり、西洋のスポーツの紹介書があげられている。そして、学校という場に着目した衛生、或いは養生読本もあり、衛生教育、啓蒙の用をなしたであろう書も収められている。

こうした、健康崇拜観がとくに学校を通じて啓蒙されていく中で、「美」観、即ち人体の美的意識にもゆらぎがあらわれる。いわゆる美容体操の教科書として著わされたものに、川瀬元九郎⁽²⁾による「衛生美容術」がある。明治35年に著わされた同書は、著者が師事

* 1985年8月8日受理

** 京都大学工学部

(1) 岸野雄三監修、大場一義編『近代体育文献集成』、日本図書センター、昭和58年。

(2) 川瀬元九郎・川瀬富美子編『衛生美容術』、明治35年、前掲『集成』所収。

したC. W. エマーソンの“Physical Culture”を伝えたものであり、女子の優美さ、健康をねらいとしたエマーソン式体操の解説書である。健康であることは美しい。美人の要素は健康であること。無論、化粧法・作法も要素にあげられよう。しかし、現在、本屋の店頭に並ぶ「美」となる技術書は枚挙に暇がない。シェイプアップマガジン、フィットネスマガジン、種々の健康書。そして産業化した化粧法、あるいは美容クラブ、エステティックサロン、ジャズダンス、エアロビクス etc. そこには、「美」の構成要素としての「健康」の揺るぎなき地位が認められる。

明治期、列強の中で生き残るために日本国家が意図した国民像は、健康なる肉体を有し、強壯な男子を産み育てる男女であった。このような状況下で求められる女性は、かつての青白き肌に細面な、なで肩、扁平な胸、ずん胴、短足な女性ではなかった。このような女性像は病的と知識人、とくに医者、衛生家の間で主張されたのである。

当時の先端的かつ急進的衛生思想の持ち主たる森林太郎嶋外はいう。

女兒の体育は男兒の体育と同等に必要なり、否、寧ろ、これよりも必要なり（中略）婦の柔質を保存して其筋骨機器を育長するに在り女兒モ亦た奔走し、跳躍し毬を抛ち、游泳し、氷靴を穿て池上を走り、舞踏し、体操すべし。⁽³⁾

また当時、衛生界の思想啓蒙機関であった大日本私立衛生会の雑誌中にもしばしば『美』と『衛生』の関連について論説がある。

美の観念は即ち衛生の思想を喚起し相待って一の習慣性を作れるもの（中略）幼時ヨリ立身坐身共ニ垂直、姿勢ヲ保ツノ

慣習ヲ養ヘシ、帯ハ男女ニ拘ハラズ堅ク縮ムヘカラス、活発ナル体技ノ類ハ独リ幼年青年ニ必要ナルノミナラス壯年己後ニ於テモ必之ヲ行フヘシ⁽⁴⁾

そして清潔美の管理主体として婦女子の存在が認められる。

女子たるもの他日人の母となりて家政の整理家庭の円満即ち之を換言すれば飲食物の調理衣服の裁縫洗濯子女の養育より看護摂生清潔等苟くも単位なる小国家の組織に関しては一切主婦の裁断に出でざるものなし⁽⁵⁾

さらに女子体育の重要性を説く。

子女の自転車に乗り若しくは男子らしき運動を為すを見てお転婆と呼び、女らしくなすと云ふのは体育を度外視しての僻目で、妄りに此評言を加ふべきものでないと思ふ。世の父母たるもの其子女の健康を望み、子孫の利害を慮るならば、裝飾の品行の弊を除いて子女の体育に注意して欲しきものである。⁽⁶⁾

美麗の意義を定む、蒼白くして病人然たる者、青黒くして朽ち葉の如き者、純白なる者、暗黒なる者、皆悉く醜也、真に美麗と称すべき者は、皮膚の組織間に於ける血液並に神経の運動潑漑たるをなす所の活々たる血色は是れ也。⁽⁷⁾

衛生、清潔、体育が美の基準に参入し、女性の体型の価値基準も変化していく。

日本に於ては従来細腰を以て女子美の資格と思へるが如き、除外の事実があるも、一般に於ては、臀部の肥大は女子の美の特別なる徴候と、総ての人から認められて居る（中略）女子の身体の肥満、

(3) フォン・フォードル“閏女の衛生”，『衛生新誌』第8号，明治22年10月25日。

(4) “美の観念と衛生の思想”，『大日本私立衛生会雑誌』第194号，明治32年，553頁。

(5) “女子の教育と衛生”，『大日本私立衛生会雑誌』第203号，明治33年，193頁。

(6) “家庭の女子体育”，『大日本私立衛生雑誌』第212号，明治34年，40頁。

(7) 佐藤得齋『美的衛生』，日高有倫堂，明治40年3月9日，144頁。

特に其臀部及上腿の充分に肥大して、脂肪の多量に蓄積せるのは、遺憾なく女性の美の発達されたもの⁽⁸⁾

知識が開けず、随つて誤つた美的観念を有つてゐた時代の日本の女は、少し前かがみの胸の平つたいのが上品の様に考へてゐた。あれは病身者の姿勢である。

(中略) いやに長い婦人の頸は、さも弱々しくさりとて団子の様な猪頸も不格好なものである。それも性来そんな骨組みならどうとも仕方がないが、併し適當の発達を促したら、病的に瘦せているものはふっくらと肥り、又、脂肪ぶとりのダブダブの頸は却つて好い格好に細くなり得る。⁽⁹⁾

この他、美的基準を健康体や体型に求める論が、とくに近代体育の女子への適用とともに増えてくるが、一方では精神的な美、しぐさの美に求めたものもある。

自ら容貌の醜悪なるを知ることを充分にして、而も肯て其生を苦しまず亦牙を咬んで発噴せず、妙齡の頃蚤く既に、洒然として思ひを情事に絶ち、光風霽月の如き胸襟を養ひ、強ねたるの態も、矯めて故らに為すの痕も無く、真に面白く、可笑くし、高く、濶く、潔く、清れやかに、花の如く、玉の如く、火の如く、錦の如く者となり、其の談ずるや江河の滾々たるが如く、其笑ふや長松の雪を落とすに似て、人をして、之に對して爽然自失せざる能はざらしむる也。⁽¹⁰⁾

いずれにせよ、以上の資料は明治20年代以降大正期までのものであり、概観するに『美』の構成に『健康』であることが要素として定着したとみてもよいだろう。では、『健康』

が『美』であることが、一体いつごろ論議されるのか。以下の資料から多少その断面を知り得よう。

前述した大日本私立衛生会は、医学、衛生、建築、土木、陸海軍、官民界広範にわたる知識人が集い、衛生教育の流布に努めた会員数4～5千人を数えた学会であり、機関紙『大日本私立衛生会雑誌』は、ほぼ月に2回発刊され、明治16(1883)年設立時より大正8(1919)年まで続いた。全巻は揃って京大医学部図書館に所蔵されている。その衛生会で、明治17(1884)年に“衛生的ノ美人ヲ娶レ”と称しかわされた議事の内容が載っている。

松山棟庵：幹事会ニ於テ副会長 長与君(専齋、内務省衛生局長——筆者注)の申さるゝにハ世人をして美人の思想を交換せしむる事衛生上甚だ大切なる一事多し。古来世人の所謂美人とハ面貌纖麗にして頸細く色白く臀腰細小にして容姿婉然たる者を云ふなり(中略)衛生上の新美人ハ其子を設くるや筋骨逞くして(中略)我会員中或ハ新婦を娶らんと欲するの諸君もあらん願くハ彼の旧美人に恋々することなく此の新美人の殊に臀部壮大なる者を撰ひ其顔ハ不行儀にして鼻ハ少しく「アグラ」をかくにも頓着せず之を娶られよ。

柳下士興：世俗に美人を娶るの慣習を交換せん為め新旧美人云々の説を述べられし。婦を娶るに美人と称する者を撰ぶときは其目的たる子孫播殖の良果を得難き故面貌容姿の醜美に拘らず臀腰肥大にしておたふく然たる良婦を撰ぶの氣風を養生せんとするに外ならず⁽¹¹⁾

ここでは筋骨逞しき女性美として「衛生美

(8) 原真男『色情と青年』、丸山舎書籍部、明治39年10月23日、35～37頁。

(9) 高峰博・ひろ子『女性肉体美学』、広文堂書店、大正10年6月10日、59頁、65頁。

(10) 佐藤得齋『科学的情慾観』、也奈義書房、明治40年2月1日、192頁。

(11) “衛生的ノ美人ヲ娶レ”、『大日本私立衛生会雑誌』第15号、明治17年、33～38頁。

人」が登場し、美人の基準を衛生上の理由、富国强兵策の下、変容させてしまおうという訳である。求められたのは「強男強女相依て配偶たらしむる」こと¹²⁾であった。

ところが、「古来吾人、美人ト賞スル織手柳腰」の婦女は多く劳咳にかかりやすく非衛生的であるとされ、反対に「筋肉充実シ腎腰肥大脂肪沢山豚々シタル婦人」を「衛生上完全無比ノ美人」と断じる傾向のあった衛生会でも、たとえ衛生上の理由にしる美人観の180度の転換には疑念の声がおこる。

顔態ハ横ニ重長ニシテ鼻ハ少シクあくら
をかくニモ頓着セス腎腰ハ白大ノ如ク恰
モ於多福トモ言ヘキ美否醜婦ヲ撰抜シ以
テ当世ノ美人トシテ結婚スヘント何程御
進メ申モ古今ノ人情到底其思想ヲ変換シ
得サルヘン¹³⁾

そして美人観をかえるよりは、美人に体育法を施し、健康体をなせばよいと説く。

殊更ニ求メテ此新美人ヲ撰ハンヨリハ寧
ロ女子体育法ヲ設ケ美人ヲ養生シ吾人ハ
素ヨリ碧眼生ノ目ヨリ之ヲ観モ顔貌姿容
共ニ婉然真ノ美人ト賞賛スヘキ良婦ヲ造
出スルコソ肝要ナラン然ラハ新婦ヲ娶ル
ニ曲テ醜婦ヲ撰ニ及ハス亦醜美変換ハ焦
慮モナク美人ハ美人醜ハ醜ニシテ何ソ不
可ナラン¹⁴⁾

一時期、衛生会で起った「衛生美人」奨励は美容の概念としてその後定着していく。明治21(1888)年の『衛生会雑誌』に、

衛生上には三平二満を以て美人となすが如き傾きをも生したる際、仏国モナン氏ハ美容及ひ健康なる一書を著わし真の美容は健康に由らされは得る能はず¹⁵⁾

また、明治22(1889)年、森林太郎の主宰する『衛生新誌』においても、

三平二満の癯婦を健康だから美と思へ、
窈窕嫵婉たる良家の女を肺病の素因があ
りさうだから醜と思へ、命令的に申さ
れたとしても誰が之に同意ませう也。¹⁶⁾

とある。

以上みてきたように、衛生思想普及の初期には「衛生的」であることがとにかく『美』の象徴とうたわれ、それまでの日本の美人観の廃棄を求められたが、結局、美は美、醜は醜、重要なのは健康法、体育法であることに明治20年代より見識が一定してくる。それは健康美、さらには西洋に負けない健民の造出ということで考え方が定着する。一方、醜は醜で切り捨てられた訳ではない。本稿では割愛したが、精神の美、しぐさの美として取り柄を残す資料もある。かつまた「衛生美人」論議の際に明確にされていた、美と醜の区分は、それ以後不分明となり、「健康であることが美人の第一条件」とした論調が前面に表われ、いわば、誰でも努力して美容のための技術を会得すれば、少なくとも「健康美」は得られるという、美の均等化が明治後期より生じてきたのである。

12) “強男強女ノ配偶ヲ望ム”, 『大日本私立衛生会雑誌』第42号, 明治19年, 49頁。

13) 立花晋 “女子体育法如何”, 『大日本私立衛生会雑誌』第18号, 明治17年, 51頁。

14) “衛生美人”, 『大日本私立衛生会雑誌』第62号, 明治21年, 543頁。

15) “女子の衛生”, 『衛生新誌』第2号, 明治22年。